

CA1
EA947
B71

#52 Jan. 1984
DOCS



特集・カナダの冬

1984年1月
No. 52

ISSN 0389-1852

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
FEB 26 1984
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030034 4

60984 81800

トピックス——2

カナダの冬と生活・平山真人——4

冬のレジャーとスポーツ——6

衣食住に見る冬の知恵——7

冬の交通と輸送——8

冬のカナダ取材・松田辰三——10

カナダのクリスマス——11

トルドー首相が平和提言——12

映像詩人ノーマン・マクラレン・登川直樹——13

われら姉妹都市⑫ 福山市&ハミルトン——15

カナダ人物記⑫ ユーサフ・カーシュ——16

編集後記——16

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

トヨタ、工場建設に着手 アルミホイールの生産へ

トヨタ自動車は、昨年の十二月一日、バンクーバー郊外でアルミホイール工場の起工式を行い、工事に着手した。

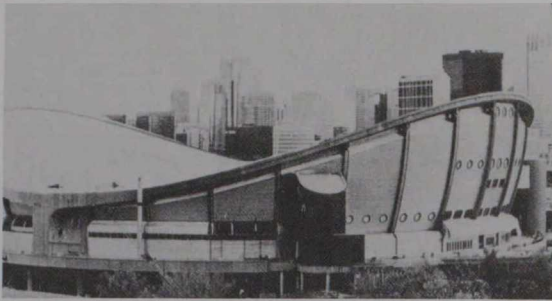
トヨタ自動車は、フリティッシュ・コロンビア州の誘致を受けて、昨年春、同社の全額出資会社「カナディアン・オートパーツ・トヨタ」(資本金七百万カナダドル)を設立した。約六万平方メートルの用地に総工費約四十五億円、従業員百人程の工場を建設、来年夏の操業をめどに月間二万個のアルミホイールを生産する計画である。

原材料はカナダ最大のアルミ会社アルキヤンから提供を受け、製品の七、八割は日本向けに輸出、残りはカナダ国内や米国で補修部品として使うことになっている。

カーリングが五輪種目に 日本でも全国大会への動き

日本では年々盛んになっているカーリングが、一九八八年にカナダのカルガリーで開催される冬期オリンピック大会で正式競技種目になることが、国際オリンピック委員会(IOC)理事会で決まった。

円形の花こう岩とブルーム(ほうき)を使って氷の上で競技するカーリングは、十六世紀初めにはすでにスコットランドで行われていたといわれ、現在ではカナダをはじめ、米国、スウェーデン、イス、ノルウェー、フランス、西ドイツ、イギリスなどで、冬のスポーツとして広く親しまれている。カーリング人口が四十万人とも五十万人ともいわれるカナダでは、毎年、青少年や、女子、一般、高齢者の全国大会も開かれている。



鞍の形をしたこの建物は、その名もサドルドーム。1988年にアルバータ州カルガリーで開催される冬期オリンピックに向けて最近完成した。

日本では、北海道の池田町が昭和五十三年に本格的に採り入れて以来、北海道を中心に年々盛んに

なった。北海道では十七の地区協会が道カーリング協会を結成しており、また東京でもカーリング・クラブおよびカーリング協会ができてくるほか、愛知、長野、富山の各県で、協会設立の機運が高まっている。名古屋には、昨年十一月、日本で初めての専用リンク(星ヶ丘スポーツP&S)も開設された。

関係者の間では、いま、日本カーリング協会の設立、そして全国カーリング大会の開催へと、準備が進んでおり、オリンピック参加に向けて動きだした。

穀物運賃を引き上げ 西部の鉄道網も大幅増強

一八九七年に、連邦政府とカナダ太平洋鉄道会社との間で合意されて以来据え置かれたままになっていた西部カナダにおける穀物輸送の法定レート(クロー・レート)が、引き上げられることになった。

政府がロッキーマウンテンのけわしいクロー峠に支線を通すため、鉄道会社に工事費を補助し、その代わり、鉄道会社が東部カナダから平原地方向けの一定の商品および西部から東部向けの穀物について輸送料金を低率に抑えることにしたのでクロー・レート。西部カナダの農家は、これによって、比較的安い料金で穀物を内外の市場へ出荷できた。しかし、鉄道会社やそれに補助をする政府にとっては負担がかさむばかりで、そのために輸送網の整備にブレーキがかかっ

ていた。

昨年十一月にクロー・レートを改訂する法案が議会を通過した結果、穀物トン当り、現在のおよそ四ドル九十セントから一九九一年秋までに二十五ドル六十セントへと引き上げられることになった。

一方で、六大穀物だけだった対象品目に、アルファルファ・ペレットなど七品目が追加された。

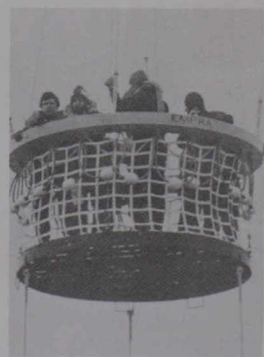
政府は、また鉄道会社に対し、年間六億五千八百万ドルの補助金を支給することになっている。それに対応して、カナダ太平洋鉄道、カナダ国鉄とも、複線化、通信設備の近代化など、大規模な輸送力増強計画を立てている。アックスワージー運輸大臣によると、今度の法律改正により、百四十億ドルの経済効果が期待でき、雇用にも大きく貢献するだろうという。

多人数を一度に救出 ゴンドラ型の網で

海上での遭難やビル火事で、一度に二十人もの人々を救出できる特殊な「かご」が、カナダで開発された。

これは、一九八二年一月に米国の首都ワシントンのポトマック川にジェット機が墜落して七十八人もの命を奪った事故で、多くの乗客が冷たい川の中で何時間も助けを求めながら沈んでいったことを知ったフリティッシュ・コロンビア州リッチモンドのジム・ブラッドリーさんが、勤め先であ

るダート・エアロ・システムズ社のエンジニア仲間と一緒に考案したものの。



緊急多人数救助装置(EMPPRA)と呼ばれるこのかごは、ちょうど地球のゴンドラのような形をしている(写真)。ヘリコプターや船のクレーンから下り下げて、一度に二十人を運ぶことができるという。上部に円形の浮き袋がついていて、水上ではそこまですっぽり水につかるため、どんなに疲労あるいは怪我している人でもその中に入る事ができる。またビルの屋上では、浮き袋の部分が床につくので、幼児や老人でも簡単に乗り込めるという。

石油掘削リグなどの事故でも威力を発揮しそうで、すでにエツソ・ベトロ・カナダ、ドーム石油などがEMPPRAを備えつけている。

国防省で禁煙大作戦

カナダ国防省では、昨年、軍人・民間人を含む省内の全員を対象に、禁煙大作戦を開始した。結果は、五〇パーセントの成功率。

「三五パーセントでもすばらしいといわれているから、この結果

Winter in Canada



カナダの冬と生活

時事通信トロント支局 平山 真人

ビールのTVコマーシャルで一躍人気者になったコメディアン・コンビ、「マックenzie・ブラザーズ」は、自国カナダを「ザ・グレイト・ホワイト・ノース」と呼んだ。「大国アメリカの北にある寒いが偉大な国」とでも解すのだろうか、自嘲と自負が入り混じった宣伝文句だ。

大きさに言えば、一年のうち半年は雪と氷に閉ざされているから、同ブラザーズよりも飲んでいると過ごせない、ということになる。フロリダやカリブ海諸島へ脱出を図るカナディアンがいることは事実だが、クロスカントリー・スキーや室内テニスに汗を流し、家庭バーティや週末のコテッジで語らうという、地味だが冬を友とした生活がいたるところに見られる。厳しい冬を体験しなければカナダを語れないといっても過言ではない。カナダの冬レポートをお届けしよう。

* * *

カナダと一口に言っても、西はブリティッシュ・コロンビア州から東はニューファンドランド州まで、その地域事情は千差万別。本稿は筆者の駐在するオンタリオ州トロント市周辺の見聞記となることをまず了解願いたい。

十月末にそれまでの「夏時間」から「冬時間」に切り替わると、「冬入り宣言」されたも同然。庭の落葉集めが一段落したところに初雪がやって来る。「十一月に入ったらいつ雪が降ってもおかしくない」というのが当地での経験則で、事実、昨年は十一月初週に雪化粧を見た。

この頃になると、外で遊んでいる子供達はフットボールからアイスホッケーに種目を変える。アイスホッケーは日本の野球に匹敵するほど人気のあるスポーツだ。アメリカと合体したプロ・リーグがあつて、カナダチームは本場の強味を發揮している。とくに、エドモントン・オイラーズというチームのグレッキ選手は、最多得点王で子供達のアイドルでもある。トルドー首相を知らなくても、グレッキ選手を知らない男の子はまずいないといつてよいだろう。男の子のいる家庭には、ホッケーのステイックが転がっているのが常だ。スケートリンクの上はもちろんのこと、近所の空地でも奇声をあげながらはね回っている。ステイックを持たずとも、アイススケートが身近な遊びで、スケート靴を肩にぶら下げながらリンクに向かう子供たちの姿は珍しくない。市役所も、冬になると庁舎前広場をスケートリンクとして開放、一日中市民でにぎわっている。

一方、大人達にとっては、冬入り準備で忙しくなる。といって雪囲いをするのではなく、車の整備と室内暖房が中心だ。まずなにをさて置いても、スノータイヤに履き換えねばならない。自宅の車庫で修理マニュアルを手に、自分でタイヤ交換やら不凍液の注入に時間を費やす人、自動車修理工場へ駆け込む人、さまざまだ。当地では道路の摩滅を嫌って、タイヤにチェーンを巻くことはしないから、雪道走行にはスノータイヤが不可欠だ。もつとも、その代わり道路の凍結防止の

ため岩塩をまくのでツルツルになる心配はないが、まめに洗車しないとさびが早くなる。それでも、冬期間は事故が多発する。

トロントはいわゆるスノーベルト地帯ではないから、積雪量はさほど多くない。一日に三十センチも積もれば、「これは大変、大雪だ」と騒ぐことになる。大雪の朝は出勤前の亭主族の仕事がひとつ増える。言わずもがな、雪かきである。この辺は日本の積雪地方と似ている。庭の芝刈りと雪かきは男の仕事と相場が決まっていて、朝一番に雪と格闘しないことには一日が始まらない。幸いカナダの雪は裏日本のベタ雪と違って砂のような粉雪が多く、郊外に住む人でなければ悪戦苦闘することはない。出勤前の目覚しと考れば苦にもならない。

室内暖房は、コタツとストーブというわけにはいかない。だいたい部屋のスペースは日本の倍と考えてよいから、セントラル・ヒーティングが不可欠。暖房が故障でもしたら一家そろって風邪をひくことになる。カナダ政府の音頭で暖房用燃料は石油から天然ガスに切り替えられつつあり、コストも安くなってきた。真冬でも室内温度は二十度前後に保たれているから、薄手のセーター一枚で快適に過ごせる。日本のようにコタツに入ってみかんを食べるといような情緒には欠けるが、ゆったりと身体を伸ばせるのは嬉しい。

室内暖房のおかげで、職場でも家庭でもお湯をふんだんに使えるのが有難い。

水とエネルギーが安いカナダならではの。冬のメインイベントは、なんといってもクリスマスだ。日本の百貨店と同様、

家の庭木や窓にカラフルな豆電球を飾り付ける。昼は何の変哲もないこの豆電球も、夜ともなると見事な雰囲気をかもし出し、いやが応でもクリスマス気分をかきたてる。普段は財布のひもを固く締めているカナダ人も、クリスマス・シーズンは例外。家族、親戚、親しい友人のためにブレゼント探しに躍起となる。といって高価な買い物をするわけでもない。ちよつと気が利いていれば何でもブレゼントになる。なかには手編みのセーター、木彫りの飾りなど手造りの品を贈る人も少なくない。そしてむしろその方が喜ばれているようでもあり、とくに主婦たちは手芸の技を磨き、競うことになる。

あとは、クリスマス前の都合のよい日を選んでパーティを開き、呼びつ呼ばれつで食事と会話を楽しむ。パーティといっても日本のように大げさではない。ちよつとしたスナックと酒があれば十分である。休暇旅行計画の話、最新の映画、



ウイスキーをちびりながら…

演劇の話題でも出せば、いくら時間があっても足りないほどに談話が長くこと間違いなしだ。

年を越すと寒さはピークになり、日中の最高気温も零下十度以上には上がらない。良く晴れた日でも、風が吹くと、いわゆる体感温度は零下二十〜三十度まで下がり、完全武装しても戸外に長くどどまっていられない。風は判で押したように北から吹き、トロントのダウンタウンでは東西の通りに比べ南北の通りは寒さが数倍にも感じられる。バスや路面電車を待つ時間が長く感じられ、首のすき間から入ってくる粉雪がうとましくなる。

トロントの地下鉄と地下街が発達したのは厳寒をしのぐ知恵だろう。ビジネス街の高層ビルは地下街が迷路のように延び、中はもちろん暖房がきているから、コートなしでビルからビルへ移動できる。地下街にはレストラン、本屋、衣料品、ドラッグストアと大抵の店はそろっており、寒さをつけて屋外で買物をする必要はない。自宅からオフィスのあるビルの地下駐車場へ乗りつけるビジネスマンは、一日中外気に触れずに仕事することだって可能だ。ビルの入口はたいがい回転ドアを備え、出入りの際寒気が入り込まないよう細かい所まで気を使っている。

ことほど左様に暖房は万全なのではあるが、迷惑な「副産物」に悩まされる。目に見えず、突然現われる曲者である。その正体は静電気。暖房で乾燥すると、所構わず発生する。ドアを開けようと

てノブに触れるとパチツ、車に乗りドアをロックしようとするとパチツ。とにかく金属に触れると放電する。金属に限らない。パーティで人と握手した時にパチツときて驚いたことさえある。

そこで欠かせないのが加湿器である。日本の北陸地方などは乾燥器がないと洗たく物の乾きが悪くて困るが、当地では



凍ったリドー運河で滑るオタワ市民。

全く逆である。小型の水車を考えてもらえばよい。濡れた回転ドラムの中でファンを回し、湿気を部屋中に散らすという至極単純な装置だが、これがあるとないとは、静電気の発生具合にずい分と差があるようだ。

カナダの冬の娯楽といえば、なんといってもスキーだ。ところがオンタリオ州は山らしい山がないので、本格的なダウンヒル・スキーはお隣のケベック州からアルバータ州にまかせるとして、最もポピュラーなのがクロスカントリー・スキーだ。カナダ統計局によると、クロスカントリー・スキーを持っているのは二百三十万世帯で、ダウンヒル・スキーの百三十

七万世帯より多い。これから見ても、クロスカントリーの方が主流とってよい。まず手軽なのがよい。隣の公園に散歩に出掛けるようなものだ。郊外にはいくつかクロスカントリー用のトレールが用



意されている。軽いサンドイッチなどをサックに入れて、真白い平原を家族そろって行進するのは実に爽快だ。新雪をかき分けながら十分も滑れば、汗が吹き出してくる。ここで熱いコーヒーよし、雪で割った冷たいジュースよし、この上ない解放感を味わえること間違いなしだ。晴天の日は小さな子供でも安全で短いコースなら参加できるし、ベテランのリーダーがつけば、雪原で野宿する長距離コースも楽しめる。質素で合理主義のカナディアンにはもってこいのウィンター・スポーツで、雪上のジョギングと考えればびつたりくる。

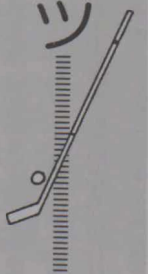
周知のごとく、カナダは湖の国でもある。オンタリオ州はなかでも無数の湖が散在している。そこで釣りファンの楽しみのひとつがアイスフィッシングだ。ト

ロントから北へ車で一時間も走れば、巨大な湖、シンコー湖がある。真冬になると、湖水表面には厚さ三十センチほどの氷が張る。氷上には、いたるところに「ハット」と呼ばれる釣り小屋(有料)が立ち、この中でホワイト・フィッシュなど、湖の主に挑戦する。氷を四角く切り取った小屋の床面に釣り糸を垂れば、あとは魚まかせ。ウイスキーでもちびりながら、のんびり談笑していればよい。小屋の中はガスストーブで暖房してあるから、昼寝だってできる。

ウイスタースポーツはなにも戸外だけではない。ちよつとしたアパートなら、地下にはプール、スカッシュ、アスレチック・ジムが備わっている。忙しいサラリーマンも、帰宅後ひと泳ぎして、運動不足解消を図るなどは日常的だ。人気が高いのはテニスだ。テニスは夏のスポーツと考えるのは大間違いで、むしろ夏の間ゴルフに明け暮れている人にとっては、冬はテニス・シーズンとなる。もちろん室内テニスだが、会員制で施設もしっかりしている。早朝から夜遅くまでオープンしており、都合のよい時間を予約しておけば待ち時間なしでプレーできる。日本企業駐在員にもテニス・ファンが多く、週末ともなると必ず姿を見かける。

カナダの冬は、二月以降が「正念場」だ。三月の声を聞けば春めいてくる日本と違い、その先はまだ長い。カナダの冬を四、五回体験すれば気も長くなり、カナダの生活ペースに慣れてくる。

冬のレジャーとスポーツ



北極の寒さは別として、零下十度や二十度くらいなら、大方のカナダ人は家中に閉じ込めてなどいない。大人も子供もさまざまなウィンター・スポーツや遊びに打ち興じ、各地では冬のスポーツ・フェスティバルがくり広げられる。

例えば、オタワのリドー運河で開かれる「冬の祭典」(ウインターフェスティバル)。毎年二月、十二日間にわたって行なわれるこの祭典は、雪と氷の国ならではの冬の一大スポーツ・イベントだ。

四十チームが参加するリドーカップ・アイスホッケー・トーナメント、創意に満ちた三輪車競争、スケートで飲み物をこぼさずに運ぶバーテンダー競争、四十キロ・スピード・スケート・レース、戸外では北米唯一のカーリング試合、十六個の樽を飛び越える樽跳び競争、走破には一泊必要の世界最長距離(百十キロ)クロスカントリー(「カナディアン・スキー・マラソン」)、サイレンや旗で飾りたてた病院のベッドにスケートをはかせたベッド・レース、イロクオイ族インディアンに伝わる難しいスノースネーク競争、歴史を偲ばせる氷上馬車競争、かんじき競争——と、種目は多彩で、国内外からつめかけた何万という観衆を熱狂させる。

国技といわれるアイスホッケーは、カナダで観戦人口が最も多いスポーツだ。冬になると路上にわかプレーヤーが続

々と出てくる。子供たちも、スケートを上手にすべる五、六歳になると、ちよつとした広場で大人のコーチを受けながらプレーし始める。母親や近所の人たちも応援にかけつけ、ちよつとした騒ぎになる。家族で楽しむものにスケートやスキーがある。とくにスキーは最近、クロスカントリーが自然と親しめる雄大なスポーツとして人気が高まっている。雪に埋もれた畑や牧場、近くの自然公園を走る手近かなコースから、数日、数週間をかけて走破する本格的なコースなど、参加者の都合や技術に応じてコースが整備されてきた。

雪上をぶつ飛ばすスノーモビルは、今や冬のファッション・スポーツ。専用のコースが町なかや国立・州立公園に作られ、競技大会も頻繁に行なわれている。



スノーモビル乗りを楽しむ人々。

マニトバ州では地域一帯の自然生態を説明するガイド付きのスノーモビル・サファリに人気が集まり、また広大なコースの各地点でトランプの札を集めるスノーモビル・ポーカーゲームも出現した。へ

衣食住に見る冬の知恵

毎年十一月から三月まで雪と氷におおわれるカナダ。日中の気温が零下十度や二十度はザラという条件の下で、快適に暮らすには、衣食住にさまざまな工夫が要る。

まず防寒着。日本にもおなじみのカウチン・セーター

衣

は、もともとカウチン族インディアンが寒い戸外で作業するために作ったもの。脱脂しない自然のままの極太毛糸で緻密に編むため、防寒、防水、耐久性にすぐれている。



冷凍食品や缶詰を味と栄養を壊さずにかかに上手に調理するかの研究も盛んだ。カナダ農務省が、「スキーツアーのための料理」とか「冷凍・缶詰素材を使ったクリスマス料理」というガイドブック

上質の毛皮や皮革を使ったコートやブーツも戸外での機能が抜群。内側に断熱性の高い新素材の繊維やフェルトを張ったり、袖口などに外気を遮断する工夫をこらしてある。カナディアン・ホワイトグースのダウンを使ったコートやスキーウェアも寒さには強い。最近では防水、除湿、保温、軽さなどの点で、天然素材の上をいく新素材(ゴアテックスなど)を特殊加工した上衣やスポンも出回ってきた。マクラクと呼ばれるスノーブーツは、靴底がかんじきと一緒にはけるように工夫され、中は二重のウール張り。北方では手袋も重ね合わせ式だ。

食

食に関しては、今日保存法と輸送手段の発達で、冬でも野菜や肉や魚がとれたてと変わらない味と栄養価で楽しめるようになった。カナダで冷凍食品や缶詰などの食品加工業が発達したのも、ひとつには冬の食料対策が大ききな理

由である。冷凍食品や缶詰を味と栄養を壊さずにかかに上手に調理するかの研究も盛んだ。カナダ農務省が、「スキーツアーのための料理」とか「冷凍・缶詰素材を使ったクリスマス料理」というガイドブック

住

冬の長いカナダでは、保温性にすぐれ、快適でしかもエネルギー効率の大きい住宅が好まれる。従来から、カナダの家は分厚くどっしりした木材を使ったり、二重壁、二重窓など断熱化に工夫をこらしてきた。政府は住宅と建材の断熱度を示すR指標を決め、誰でも客観的に断熱性能を判断できるようにしたりしている。

一昨年、政府は業界と協力して、「超省エネルギー住宅計画」を発足させた。これは断熱材だけでなく、総合的な省エネルギー技術を使って、従来通りの快適なライフスタイルを保ちながら、居住に要するエネルギー量を五〜八割減らそうという、

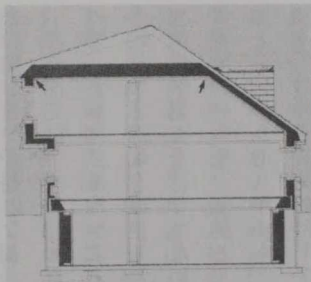
一方、寒い中をじつと動かずにレジャーを楽しむ人々もいる。氷上穴釣りがそれだ。最近ではストロー付きの小さな貸し小屋(一人用)商売が流行っている。氷上で重たい丸石をゴールめがけて滑らせ、ホウキで前方をはきながら誘導するのがカーリング。アイスホッケーが観るスポーツなら、こちらは友人や家族同

意欲的な住宅改善計画である。

西暦二〇〇〇年に向けてR-2000

住宅と呼ばれるこの家は、エネルギー効率のよい構造設計、断熱基準の改善、気密性と遮湿性、廃熱回収システム、暖房装置の小型・効率化を主体としたもの。どんな地域、建築様式にも適用できる省エネ技術の粋を集めた住宅で、政府は初年度(八三年)三百棟を建てることにした。

例えば断熱化の工夫を見ると、地下室、外壁、屋根裏などに特殊断熱材を使ったリ、厚さを倍増したり、多重化する。ま



外りる、取り込み、用達を組む、倍部を組む、3部を組む、2部を組む、1部を組む、通常の空気(矢印)を通す壁、断熱材を入れたシステムR-2000住宅。

た換気の際、部屋に取り入れる外気と外に出す温かい空気の間で熱交換するシステムを壁に組み込む。内壁はポリエチレンの気密・防湿膜ですっぽりくるみ、ド

士で和気あいあいを楽しむ社交的なスポーツ。冬は各種のトナメントでにぎわう。スケートの代わりにスニーカーをはき、スティックの代わりに先を切り揃えたホウキでゴムまりを追っかけるブルームホールも、新しいスポーツとして人気が出てきた。今冬には早速日本にも紹介され、愛好者も増えてきた。

アや窓には密閉シールを用い、場合によっては玄関はエアカーテンを取りつける。窓はなるべく南面にとり、二重、三重ガラスにする。

R-2000住宅は、いわば政府が奨める省エネのモデルハウスだが、民間でも暖かく快適で、かつ経済性の高い住まいにするために、いろいろなアイデアが生まれている。例えば、煙突から暖気が逃げる暖炉に代わる屋外用ガス燃焼装置、断熱性にすぐれたファイバーグラス住宅、ログ(丸太)ハウスの壁のすきまを防ぐ密閉剤、コンクリート外壁に取りつける断熱パネル(ポリスチレンフォーム)にグラスファイバーをコーティング)などの開発がそれである。

冬季の建築技術も、一昔前とくらべて格段に進歩した。以前は冬になると作業をストップしていたのが、気温が氷点下でも作業ができるように、例えばあらかじめ混合加熱したコンクリートを使ったリ、建築現場にすっぽりかぶせて内部を暖房できる大型テントが開発された。このため、建築労働者の通年雇用が可能になったという。

氷雪対策に様々な工夫

カナダの冬は、長くて厳しい。北極諸島をはじめ、国土の四分の一は土地の温度が一年を通じて摂氏零度以下で地下が常に凍結しているという、いわゆる永久凍土地帯。北極海は一年の大半が厚い氷におおわれ、南の湾や河川も数か月は氷結してしまう。都市にしても、一日の平均最高気温が一年のうち五か月間は十度以下というのがほとんどで、一月の平均気温は首都オタワで最高がマイナス六・一度、最低がマイナス十六・一度という寒さである。

大活躍のACV

カナダは、この問題に早くから真剣に取り組んできた。例えばスノーモビルは、すでに北方カナダで犬ゾリに代わる乗物として利用されるようになったし、砕氷船技術でもカナダは世界のトップレベルをいつている。また、航空機や飛行場、あるいは鉄道路線、自動車、道路除雪などにも、雪国らしい独特の工夫がなされている。

カナダの開発したものとして特に知られているのは、空気噴射式のいわゆるエア・クッション車（ACV）。これはホバークラフトの技術を応用したもので、雪沼地、氷、あるいは水（河川や海または湖）の上、さらには道のないデコボコ地帯でも人や荷物を輸送できるのが特徴。ACVはまた、河川や湖に張った厚い氷を割るのにも威力を発揮し、すでに数年来、セント・ローレンス川と支流との合流点に集積する大きい氷を除くのに、大活躍してきた。

カナダ科学技術振興事業団（NRC）の機械工学部では高速で効率よく砕氷できるACVや、在来型の砕氷船や商船の船首に取りつけられるACVプラットフォームの開発に取り組んでいる。

（このプラットフォームは、下から空気を噴射して、水面を氷より下に押し下げ、その結果生じたエアポケットによって、氷を割れやすくするもの。厚さ八センチの氷がこの方法で割れるという。プラットフォームをつけた船は、つけない場合と比べて、二倍の砕氷能力をもち、しかも燃費が大幅に節約されることが証明されている。）

天然ガスや石油の探査・開発が続いて

いる北極海では、資材を運搬する船の往來が絶えない。今後は、開発された石油や天然ガスをカナダ南部の都市に運ぶための砕氷船や航法援助施設、海上汚染除去設備などが必要になる。

北極海では、例年、七月から十月にかけて、資源開発基地や北方の村々に物資を輸送する商船を護送したり、水路測量や海洋学調査を行なうため、カナダ沿岸警備隊の砕氷船が活動している。これに加えて、一九七八年から、実験的にバラ積み用の砕氷貨物船MVアークティック号も運航している。MVアークティック



砕氷にも活躍するエア・クッション車。

けて継続的に運航できるように、原子力と通常燃料を使った砕氷船や海水の位置や強度を遠隔測定できる技術、レーダー衛星で航路や石油開発基地近くの流水を確認する技術などの開発が進められている。またポーフォート海で開発された石油を運び出す大型砕氷タンカーの研究も続けられており、日本も運輸省船舶技術研究所がカナダ科学技術振興事業団と組んで、二十万トン級砕氷タンカーの設計研究を行なうことになっている。

専門家によると、技術的には、ここ五年内に北極海が一年を通じて航行できるようにするという。

セント・ローレンス水路や五大湖、あるいはその他の航行できる湖水では、冬の間、沿岸警備隊の砕氷船や前述のACVがフル回転しており、真冬の航海もそれほど支障がなくなった。こうした砕氷活動は、単に船舶の通行に役立っているだけでなく、出水防止にもなっている。

北方では臨時道路も

冬にカナダの都市を訪れると、車道がどこでもきれいに除雪されていることに感心する。道路に塩や砂をまいて雪を溶かしたり、グレーダー（地ならし機）やローダー（積み込み機）を使って雪を道路わきに片づけたり、あるいはトラックに積み込んで、郊外の空地や近くの川に運んでいるからだ。特に高速道路の整備はいい。高速道路は除雪しやすいように、周辺より一段高く作られ、しかも両わきにみぞをつけてある。

それでも、道路の途中で燃料が切れて立ち往生したり、ときには車の中で凍え死ぬ場合もある。あるいは、道路が滑りやすかったり、フロントガラスに氷がついて視界がきかなくなるために起こる事故も少なくない。

そのため、当局では毎冬、車を運転する人たちに、アイス・スクレーパー（氷をかき落とす）やスノーブラッシュ（雪を払い落とす）といった常備品はもちろん、防寒具、電灯および点滅灯、救急箱、牽引用のチェーンやロープ、タイヤ・チェーン、乾いた砂、バッテリー用のジャンパー線を必ず携帯するよう、呼びかけ



砕氷船から北方の村に物資を運ぶソリつきヘリコプター。

ている。

北方になると話が違ふ。北極圏を突っ切つてポーアト海まで延びるデンブスター・ハイウエーでは、風に吹かれた雪が、ところによって数メートルも積も

る。除雪車が二十四時間、雪を片づけているが、遠隔地のため、道路管理は都市のようにはいかない。

そこで北方では、補助道路を作ることになる。ユートン準州の道路監督官チエスター・キャンピオン氏は言う。

「われわれには大きいプロアー（雪を吹き飛ばす扇風機型除雪車）と数台のグレーターがあるが、二か所で雪の溜まりかたがあまり早いので、とても追いつかない。そこで山の麓に補助道路を作ることにした」

つごうのいいことに、川や湖の表面には、冬の間、厚い氷が張るので、そこは道路や飛行場に早変わりする。（氷が解ける四月中旬から五月末まで、また河川が氷結する十月中旬から十一月末までは、デンブスター・ハイウエーは閉鎖される。その間、一帯ではカリブーが群れをなして、ユートン準州とアラスカの間を移動する姿が見られる。）

空気膜でポイント保護

長距離貨物輸送に欠かせない鉄道にも、さまざまな冬対策がなされている。

厳しい冬の最中、鉄道輸送網を確保する上での大きな悩みは、雪や氷の中で転つ器（ポイント）をいかにして作動させ続けるかということである。通常のポイントだと雪や氷がたまって動かなくなってしまう。特にカナダの場合は単線が多いため、たったひとつのポイントが凍つても、その影響は計り知れない。

科学技術振興事業団の低温研究所では、

一九六八年以来、この課題に取り組んできた。そして、スコップとホウキに代わるものとして、水を熱で溶かすか風で雪を吹き飛ばす方法を思いついた。結局、冬の間、ポイントに雪や氷がつかない温熱装置を開発した。

しかし燃料費が高くつく上、枕木やプラスチックにも良くないことが分かった。そこで同研究所は、雪がポイントの上に降らないようにするための高速の空気膜を作る装置を開発。これは実験結果もよく、民間会社がすでに企業化している。

低温研究所では、そのほか、ポイント自身が雪や氷をこすり落とす装置の実験や、冬になると故障しやすい機関車の補助ベアリングの改善を進めている。

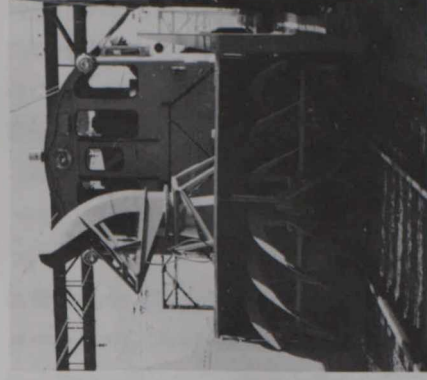
尿素で滑走路の凍結予防

空の交通はどうだろうか。航空路が四方八方に延び、飛行機が旅客および貨物のきわめて重要な輸送手段になっているカナダでは、冬対策に万全の注意が払われている。

まず空港。カナダ統計庁によると、カナダの航空会社上位八社が一九八一年に蒙つた欠航による損害は八十億ドルあまり。その多くが天候のせいであった。

特に問題なのは、天気が雨から雪に変わり、さらに気温が下がって滑走路が凍結してしまう場合だ。固い透明な氷が張って、非常に滑りやすくなるからだ。

そういう状況が予想されるときは、事前に固型の尿素をまく。尿素は水面を溶かしてアスファルトに達し、氷を滑走路



冬の鉄道運行に、除雪は欠かせない。大雪になると、前方に排雪板や除雪機をとりつけた工事列車を走らせたり、ブルドーザーやローターが出動する。それでも不十分な場合は、除雪機と噴霧機を組み合わせたスノーファイター（写真）の出まじとなる。（CZ 提供）

面から引き離してしまう効果がある。凍結処理の前に滑走路表面が凍結した場合は、尿素と砂をまいて効果を高める。

しかし、気温が氷点下三度を割ると、尿素や砂も効き目がなくなる。そのときは、ぎざぎざの歯をつけたグレーターで、へばりついた氷をこすり取るしかない。

その間、駐機している飛行機の表面にも氷が張って、結氷除去剤を噴霧するか、ハンガー内で暖めなければならぬほどで、空港はもちろん閉鎖される。

また飛行機については、カナダ科学技術振興事業団の低温研究所が、タービンの凍結防止の研究に取り組んでいるほか、レイ・インスツルメントおよびデジタル・エレクトロニクス・ラボラトリーズ社と共同で、ヘリコプターのパイロットにローター（回転翼）氷結の危険を警告する感知器を開発した。

冬のカナダ取材



北日本放送報道局次長 松田 辰三

厳冬期にカナダを取材したのは、はじめての体験だった。

私たちが取材したのは、モントリオール、ケベック市、オタワの三都市だけではないが、出発前の事前調査の段階で、東京大学のK教授に「寒さのなかで快適に生活できる街は、一年中心地よく都市生活のできる街だよ」と教えていただいた言葉が、カナダの都市に生きているのを感じた。それぞれの都市構造に個性がはつきりと生かされていた。そしてどの都市にも共通した安堵感を、私は抱いた。こうした安堵感のある街づくりを探るのが、私たちの取材旅行の目的でもあった。

富山県は、水よく食物も新鮮、働きものの県民性と三拍子そろっていて、「いい人、いい味、いきいき富山」と宣伝している。しかし冬だけが泣きどころ。世界でも有数の多雪地帯だからである。

皮肉なことに、雪に埋もれて堪え忍んできた時代は終わって、太平洋側と変わらない近代的な交通システムあるいは近代建築になったために、昭和三十八年と五十六年のあの有名な豪雪のとき、家は重い雪に耐えられず、交通も寸断、百万人が孤立するハメになった。

昭和五十八年は富山県誕生百年記念の

年であり、数々の行事が行われたが、私は「無雪害都市づくり」、つまり冬でも快適に生活できる街づくりのため雪と氷の先進国、とくに都市工学的に優れたカナダとスウェーデンの取材を提案し、受け入れられた。富山県も、昭和五十六年から総合的に雪対策研究会議を続けてい



ケベックのウインター・カーニバル。

たが、私はテレビの映像をもって提言することにしたのである。

* * *

二月のモントリオール空港には、二十〜三十センチの積雪があり、少しは安心した。いくらなんでも、全く雪のない街の取材は、サマにならない。バスの運転手、セゲン氏は、「この雪は昨日降った

ものだ。皆さんを歓迎したんだ」と言ってくれたが、私たちの期待を裏切るほどの暖冬であった。

モントリオールは、一九六七年のエキスポで地下鉄が誕生。九年後のオリンピックには、その地下鉄をネットワーク化し、周辺部に広がった居住地区、ミニ都市化した団地と市の中心部を見事に結んだ。

さらに都市再開発によって生まれた、市中心部の立体大地下街では、広々としたプロムナードを歩くと三百店を数える色とりどりの商店が並び、二段・三段と交差するエスカレーター、明々と輝く照明の工夫、片隅に恋人たちの憩うカフェベンチ——メトロを降りてエスカレーターに乗るとこんな風景に出合う。

前に取材した札幌市の大地下街オーロラと比べて、ボナベンチャのなんとゆとりのあることか。人の動きに時差をつけただからだろうか。いやそれよりも、ヨーロッパ的な優雅さがひそかに設計されているからだろうか。

札幌市の地下街は、道路の下だけに限定されているが、モントリオールの場合にはビル街と地下街が上下一体に作られている。だから地下鉄で通勤するサラリーマンは、地上のマイナス十五度にさらされることなくオフィスに通うことができ。ただ、一街区の地下街は、大通りをはさんで次の街区につながらない。なぜだろうか。

札幌市の地下鉄は、モントリオール市のメトロを参考にしているという。タイ

ヤ式で騒音のない、乗り心地のよい（大東京の銀座線とは比べものにならない）スマートな、これまたゆったりと乗れるメトロになっていた。もつとも札幌の友人によると、慣れるまで、タイヤのお



道路の雪を吹き飛ばす除雪車(ブローア)。

いが鼻についたという。

札幌市に比べて、モントリオールのメトロはさらにゆったりとした感じに思えた。それにもまして、ステーションの天井は高く、柱は太い。壁画や彫刻を配し、まるでひとつひとつの駅が個性を誇った美術館のようだ。

* * *

早朝、市の中心街の除雪を取材した。除雪は広い歩道からはじまる。幹線の手道の雪を歩道わきに積み上げる富山とは対照的に、ここでは人間優先があたりまえのこととして除雪が行われている。



冬のカナダ取材する北日本放送の取材チーム。

歩道から車道わきに雪を出し、それをグレーダーで片側に寄せる。ローダーが雪をかき集めて吸い上げ、あつという間に巨大なトレーラーダンプに流し込んでしまふ。この除雪機動車の一団が、ゆっくりと走りながら、歩道と車道の雪をすっかり片づけてしまふ光景は、壮観であつた。雪は出勤時間前に運び去つてしまふので、どこにも車の渋滞は見られなかつた。

セント・ローレンス川にかかる巨大な橋は、中央部の橋のらん干が開き、トレーラーダンプが横づけではなく、橋をしゃ断する形で雪をまっさかさまに川にはおり込んでゆく。それでいて、車は特別の支障もなく、二車線のまま流れている。このグレートブリッジを思いつき、設計したのは誰なのか、聞き出すのを忘れてしまつた。

* * *

保険会社のプロモーション・ディレクター、ビエール・レクレア氏の家を訪問した。グレートウエストの閑静な森に囲まれた住宅地にあるレクレア氏の家は、寒冷地でも快適に生活できるように設計され、学ぶところが多かつた。冬の寒さを気にしない、むしろクロスカントリー

など冬のスポーツが楽しめて冬が大好きというニコル夫人。こたつに丸くなる富山とは大違いである。十七、八世紀のヨーロッパと見違える古い建物がよく保存されているケベック市で、雪のカーニバルを見た。撰氏マイナス二十度という寒さだが、カーニバルを見るために、多くの観光客が国内各地やアメリカ、そしてはるばる海を越えて世界中から集まつてきていた。さまざまな氷の彫刻や競技だけでなく、古い街の情緒に引かれてくるのだろうか。

カナダのクリスマスには、幾つもの顔がある。世界の各地からこの北国に住みついた人々は、先祖を偲ばせる自分たちのクリスマスをそれぞれに持っている。昔ながらの最も素朴なクリスマスマスを頑固に守っているのは、アイルランドやイギリス系の多いニューファンドランドだ。真夜中のミサ。仮装した子供たちが、夜の街を歌い踊りながらパレードし、年寄りや病人のいる家を訪問する。フランス系の多いケベック州では、何週間も前から家族全員で家やツリーを飾り、キリスト誕生のミニチュア・シーンを作る。イブには肉を避けた簡単な食事をとり、ミサに出かける。帰宅後、友人や親類縁者一同が集まってプレゼントを交換したのち、一年で最大の馳走——食前酒、オードブル、ミート・タルト、七面鳥やあひる、野菜、サラダ、フルーツケーキに舌鼓を

カナダのクリスマス

カーニバルの規模は札幌のほうが、ずっと大きい。だがケベックのカーニバルは、何といつても楽しい。寒いけれど、ゆっくり歩きながら見ていたい——そういう雰囲気がある。カーニバルは、市民だけで運営していると聞いた。取材にに応じてくれた実行委員会の人はみんな陽気で、気さくだった。祭りの広場を埋めつくした人々は、リズムカルな音楽にあわせて踊っている。もつともマイナス二十度では、じっとし

打つ。イタリア系のサンタクロースは、ひげのおじいさんならぬおばあさん。良い子はプレゼントを貰えるが、悪い子にはひとかけらの石炭しかくれない。オランダ系の人々は、プレゼントをイブの二週間も前、聖ニコラス（サンタクロース）の日の十二月六日に交換する。トロントのメトロ動物園では、動物たちにもクリスマスはやってくる。十二月二十六日、サンタたちが大勢の見物人を引き連れて、動物たちにプレゼントを配って歩くのだ。インディアンと欧州系との混血、メテイスの流れをくむ家々では、クリスマスは一族が親交を深める日だ。十二月二十四日、男たちはライフルの祝砲で祝宴の開始を告げ、以後二週間にわたってお祝いが続く。モカシンをはき、サッシュヤ

ろという方が無理。白い息をはきながら顔を紅潮させて踊る人々の表情は、いかにも楽しそうだった。この街の、観光客がつかめた一角は、なぜか、飛驒の高山の、小粋な土産店や茶店のならば、趣味的な古い街並みに似ていた。冷たい都市開発ではなく、常に人間を考え、人間が安堵できるカナダの街づくり。私はそのことに限りなく心をひかれた。



ビーズの装身具で正装した一族が、夜明けまで歌や踊りで過ごす。クリスマスに人々が待ちこがれる冬の一大イベントが、二月のカーニバル。ケベック市では全市をあげて雪と氷の彫刻コンテストや競技大会を十日間にわたって繰り広げる。またスノーゴルフや水上野球、障害物スキーが呼び物のBC

州バーノンズのカーニバル、かんじき競走、モカシンダンスなどで知られるマニトバ州セントボンフェスのボヤジャー祭り——いずれも戸外で冬のユーモアを楽しむ。カナダには、ホワイト・クリスマスと雪祭りがよく似合う。

マクラレン(写真NFB)。



映像詩人ノーマン・マクラレン

日本大学教授

登川直樹

毎年、夏から秋にかけて、カナダ東部は映画祭でにぎわう。八月にはモントリオールで世界映画祭があり、九月にはトロントで国際映画祭が催される。偶数年だとオタワでアニメーション映画祭がひらかれるが、これも九月である。

一九八三年秋のトロント映画祭で上映された映画のなかに、ノーマン・マクラレンの新作「ナルシス」があった。例によって彼の独創的な表現は注目をあつめたが、そのマクラレンがこの映画を最後に映画製作をやめると発表したことは、もう一つの大きな話題になった。

マクラレンといえは、世界でもっともユニークな製作活動を展開したアニメーション作家であり、その作品の多くが国内でも国外でも受賞を重ねて輝やかな業績をのこした人である。一九四一年からカナダの国立映画制作庁(NFB)でアニメーション映画ひとすじに歩いてきた。その作品も五十本をこえる。すでに六十九才だから、引退を表明してもおかしくないが、一作一作にこめられた豊かな感性にふれていると、まだまだその独創的なアイデアと技法で、すばらしい映画を作りつづけてほしい気がする。

マクラレンがカナダの世界的アニメ作家になったのは、まったく運命だったと言っている。もともと彼はスターリング(スコットランド)の生まれで、グラスゴウの美術学校へ入ったのも父のあとを継いで室内装飾家になるつもりだったからだが、学生時代に映画にとりつかれた。映画館へ通うだけでは足りず自分でも作

りだしたのが、彼の映画人生のはじまりだった。というのは、学生生活に取材した16ミリ映画がアマチュア映画コンクール

作品「ババド・ドウ」から(NFB)。



で入賞し、その審査員だったジョン・グリアスンに認められて、彼のもとで映画製作を職業に選んだからである。当時グ

リアスンは、イギリス政府を説いてGPO(郵政総局)に映画部を作らせ、すぐれたドキュメンタリー映画作家を育てた。若いマクラレンはここですす記録映画に携り、アイヴァ・モンターギユがスペインに内乱の記録を撮りに行ったときに、カメラマンとして同行した。

そのGPO時代に、マクラレンは早くもアニメーションでPR映画をつくった。当時イギリスには図形アニメのレン・ライがいたし、アメリカには踊る図形の音楽映画をつくるオスカー・フィッティングなどがいて、それらに大いに刺激されたと彼は述懐しているが、やはりマクラレンには独自の才能がすでに芽をふいていたに違いない。カメラを使わずにフィルムに直接描く手法もこのころ試みている。

グリアスンがカナダ政府に招かれてカナダ国立映画制作庁の設立に尽力し、その初代長官になったころ、マクラレンはアメリカにいた。せっせと絵を描いたり、グッゲンハイム美術館の仕事を手伝った

りしている。が、再びグリアスンに招かれて、こんどはNFBへ入る。そして思う存分、実験的なアニメーション映画を作った。初期のNFB時代は、音楽アニメ映画の実験期だったと言っている。民謡や行進曲にのせて図形を踊らせるような、せいぜい二、三分の短編が多かった。もちろん貯蓄奨励金のインフレ防止だのといったメッセージをもつてはいたが、彼のよいうな実験的アニメを許したというのは、すぐれた才能に幅広い理解を示すNFBの運営方針のあらわれである。

マクラレンが国際的に認められた最初の作品は「隣人(一九五二)」である。隣り合った家の男たちが境界線上に咲いた一本の草花をめぐって大乱闘を演じる話は、滑稽な上に意味深長で、そのラストの



黒いフィルムに音を彫り込むマクラレン(NFB)。作品は「算数遊び」。

「だから同胞に親切に」の各国語の字幕が意味するように、平和への願望がこめられている。さすがに彼が「ユネスコの派遣で中国へ渡って友情の尊さを知り、帰国後朝鮮戦争が勃発して大いに考えさせられた。それがこの作品を生む動機に

なった」と説明しただけのことはある。もちろんテーマだけではない。人間コマ撮りというアイデアが、すばらしい効果をつくりだしている。「隣人」はアメリカ



「ナルシス」の製作で振り付け師、カメラマンと打ち合わせるマクラレン(中央)。右端は主人公を演じるジャン=ルイ・モラン(NFB)。

カのアカデミー賞を受賞した。

一九五〇年代に私たちはささやかな研究グループをつくり、日本で公開されない名作をさがしては見ていた。「隣人」もその機会に見たわけで、以来マクラレンの名はいつも私の頭の片隅にあった。幸いにも、その頃東和映画がマクラレンの映画を輸入して長編映画につけて封切った。「Blinking Blank」(一九五五)が「線と色の即興詩」、「Rhythmic」(一九五五)が「算数あそび」、「A Chairy Tale」(一九五七)が「たすけ椅子」、「Le Merle」(一九五八)が「小鳥のファンタジー」といったスマートな日本語題名は、そのときつけたものである。

私のマクラレンとの出会いは、彼の親

友グラント・ムンロのおかげである。一九六五年、私はユネスコの会議でポロランドに行ったが、世界の美術映画を話し合うその会議にカナダから来ていたのがムンロであった。翌六七年、モントリオールでNFBの彼を訪ねたとき、その紹介で私はマクラレンを知ったのである。

マクラレンは早速、当時製作中の「Pas de Deux」のラッシュをムウイオラで見せてくれた。翌年訪ねたときもまだ完成していなかった。十数分の映画に一年も二年もかける彼の慎重で丁寧な仕事ぶりに敬服し、それを許すNFBを羨しいと思つた。それがルーミアの民族音楽と結びついて、すばらしい重ね焼きのストロボ的な画像が展開するのを見たのは、さらにその翌年だった。

マクラレンのすばらしさは、まず奇抜な技法から出発することである。カメラを使わずに、フィルムに直接絵を描いたり、膜面に釘や針でキズをつけたり、横縞をサウンド・トラックに焼付けてマイクを使わずに音をだしたり、フィルムの右端から左端へ斜めに長い線をひくだけで一本の縦線が右から左へ動いていくのを見せたり、二枚の絵を深いオーバーラップでつないでその間がうごくようにみせたり、ナマの人間をコマづつ撮って全くあり得ない動きをつくりだしたりする。まず技法ありき、なのだ。

しかしその技法を技法だけに終らせず、すばらしい効果にまとめあげるためのもう一つのアイデアを加えること、さらにそれを緻密な技術で完成させることが必

ず結びつく。一つの技法はつぎの技法を生むヒントになっている。「カノン」は輪唱のように少しずらせた重ね焼きで、後のイメージが前のイメージを追っかけていく効果をつくりだしたが、これをヒントにもっと発展させたのが「パ・ド・ドゥ」だった。そのバレエの踊りをややスロー・モーションにすることで、全くエレガントな動きをつくりだしたのが「パレー・アダジオ」(一九七二)だ。

さてこんどの「ナルシス」もまたバレエである。踊りの動きを、画面をとばしたり重ねたり、自由自在に別のうごきに作りかえているというからおもしろい。話には三部に分かれていて、その最後の部分で絢爛たるテクニクを見せるのだという。

一九七八年に訪ねたとき、彼はギリシヤ神話のナルシスをやるつもりだと抱負をきかせてくれた。ナルシスなら水鏡に



「ナルシス」の一場面(NFB)。

うつる自分の美しさに感動するのだから、当然ここは重ね焼きや鏡を使うのだろうと想像した。翌年モントリオールで電話したときも、まだ構想を練っている段階ときき、その慎重さはいつものことと納得した。確信のもてるところでなければ形にしないのだ。

一九六六年、モントリオールの彼のマシオンで会ったとき、一緒だった製作

部長のガイ・グロウヴァーも親友のグラント・ムンロも大いにはしゃいで、私も負けずに大声をたてたが、ひとりマクラレンだけはささやくように喋るのを、あとで私は彼が心臓の持病をいたわっているせいだと知って悪いことをしたと思つた。彼はまた人一倍責任感が強いと思つたが、一九七〇年、川喜多かしこさんに日本へ招待された時、出発直前に足を滑らせて肋骨を折ったというのに、約束を守って日本に来て、スケジュール通り岩波ホールで講演した。ユーモアたっぷりな彼の話を、客席いっぱい聴衆は大いにたのしんだが、肋骨の折れたからだとは、誰一人知らなかったはずである。

ノーマン・マクラレンの偉大さを言いつくすことは難しい。奇想天外なアイデアも緻密な技術も、それらを結びつけるスタイルも、すべて彼の豊かな感受性から来ているということになるが、その根底にはやはり聖なる作家精神があると言うのが正しかろう。マクラレンの秘密は、どんなモノにも生命力をもたせる造物主的な能力である。彼の手にかかると椅子も人間に甘えたりスネたり泣いてみせたりするではないか。数字だつていたずらをしたり怒ったりするし、マイクだつて頑固に人間に反抗してみせるではないか。アニメーションが本来モノに生命を与えることならば、マクラレンこそ真の意味でアニメーション作家の名に値すると言ふべきだろう。引退の声明をきいて、もう一度彼の一作一作を見直したい衝動に駆られている。

福山市とハミルトン

わが懐しのハミルトンニアン

藤井由和

親善訪問団の団長として、福山市の中
高生十四人を連れてハミルトン市を訪れ
たのは、一九八〇年のことである。夏の
六日間、ハミルトン市に滞在したが、私
は、ご主人が高校教師、奥さんが病院勤
務、息子一人と娘三人のいるラスキーナ
家にお世話になった。息子ダリル君の部
屋が私に提供された。ダリル君はその間、
どこかへ行って泊っていた。

になると身振り、手振りで補いながら結
構対話を楽しみ、ハミルトンを去るとき
は、ホストファミリーの人たちも、肉親
との別離に心痛むかのように、悲しみ泣
いていた。子どもたちは、ハミルトンで
生活を共にし、語り合い、親善交流を見
事に果たしてくれた。

家族の一員として迎えられて、ファー
スト・ネームで呼び合い、冷蔵庫や地下
の洗濯機や乾燥機も自由に使用してくれ
た。私が一番感激したのは、共稼ぎ家庭
であるため家の出入りに私が不自由では
なく、私に家の鍵を渡
してくれたことであ
る。他人でしかも外
国人である私に家の
鍵を渡すことのでき
る心の広さ、私に対
する信頼が、例えよ
うもなく嬉しかった。

ハミルトンから青少年親善訪問団が訪
れた際は、ホームステイ、観光、公式行
事のほかに、福山市ユネスコ協会の青年
たちと楽しい交流のひと時を過ごした。
ハミルトンの子どもたちは福山っ子にな
りきり、ひとつの輪になって「ハナイチ
モンメ」に興じたりして、友情を温め合
うことができ、福山駅頭ではやはり涙の
別れとなった。
政財界人や一般市民の交流も続してい
る。

●ハミルトン
あちこちの家庭に分散滞
在した中高生たちも、当初
は不安で緊張し、辞書片手
に悪戦苦闘していたが、環
境に慣れるのが早く、後半

一九八二年八月にはハミルトン出身の
大学生三人が市内に分散滞在したが、私
の小さな家でもそのうち一人を家族の一
員として迎えた。滞在最終日に三人を広
島に案内、原爆ドーム、資料館を見終わ
ったとき、陽気な彼らは無口になった。
昨年五月には、地元紙スペクテーター
のカメラマン、ポール・ホリガン氏が、
空手七段のドン・ウォーナー氏とその弟

子三人とともに福山を訪れた。ホリガン
氏は福山紹介のための写真取材で駆け回
り、ウォーナー氏たちは武道館での空手
交流のほか、私の勤めている中学校で生
徒たちに模範演技を見せてくれた。
続いて訪れたハミルトン商工会議所の
ムレイ会頭は、市に土地を寄贈して親善
交流施設を作る予定を伝えた。

それにしても、私たちは相手国や市を
余りにも知らなすぎた。短い日程の中
で慌ただしく行事をこなす観光してまわ
るだけではだめで、短くとも一週間はホ
ームステイをし、家庭生活に触れ、市民
に接し、市内の裏街まで足をのばすべ
きである。訪問国の言葉を片言でも話そう
と努力しないのは傲慢である。訪問国の
国歌を一体何人が知っているだろうか。
訪問中、万一切かの行事で国歌演奏があ



ハミルトン市庁舎の前で。

ったとき、恥
をかかなくて
はすまされな
いだろう。お
互いの市で
「親善都市訪問
ガイドブック」
ぐらい作るべ
きだ。姉妹都
市への関わり
を一部の人た
ちにとどめる
ことなく、す
べての市民に
啓蒙する取り
組みが日常的

・恒常的になされ、
そのためのコーナー
も常設されるべきである。
姉妹都市緑組をしたか
らには、それに熱っぽく関
わり、愛情をもって忍耐強
く育てることをしないと、
国際親善・国際理解どころか、国際誤解
を招き、お互いに心を傷つけ合うことにも
なりかねない。

(福山市立広瀬中学校長)

福山市がハミルトンと姉妹緑組をし
たのは一九七六年十月。その五年前にハ
ミルトンを訪問した福山市の市長が、産
業活動が旺盛で生活環境も良く整備され
ている様子を見て同市との友好親善を打
診したのが、提携のきっかけとなった。
鉄鋼の町同士の結びつきである。
トロントから西へ六十五キロ、オンタ
リオ湖に面するハミルトン市は、セント・
ローレンス水路の要衝で、「カナダのピ
ッツバーグ」と呼ばれる鉄鋼生産の中心
地。名門マクマスター大学やロイヤル・
ボタニカル・ガーデン、フットボールの
殿堂——などの所在地としても知られる。

この姉妹都市シリーズは、一応これ
で打ち切ります。一九八〇年以降に姉
妹提携した都市については、改めてご
紹介する予定です。

ユーサフ・カーシユ

「ユーサフ・カーシユほど数多くの偉人たちをカメラにおさめてきた写真家は他にあまりない（中略）。カーシユの行動半径は文字通り世界にまたがっている。彼の手になる肖像写真は現代史を側面から魅力的に照らし出す……」

カナダ人物記⑫

一九六八年にボストン美術館（米マサチューセッツ州）のラスボーン館長が、同美術館でのカーシユ写真展「世界をつくる人々」に寄せたこの言葉は、巨匠カーシユの真骨頂をよく表わしている。

Faces of Destiny（一九四六年）『Portraits of Greatness（一九五九年）に始まる一連の写

真集におさめられたカーシユの作品には、チャーチルあり、ローマ法王あり、英国やモナコの皇族、ピカソ、アインシュタイン、ジャン・コクトー、ヘレン・ケラー、ケネディ、フルシチョフ、ブリジッド・バルドーありで、まさに二十世紀を代表する顔が、きら星のごとく並んでいる。

カーシユは一九〇八年十二月二十三日、トルコ領アルメニアのマルディンで生まれた。独立アルバニア共和国が一九二一年に崩壊したあと、写真屋のおじと共にカナダに移住。まもなくして、当時肖像写真家として名声を得ていたボストンのジョン・H・ガロのもとで修練を積む。

一九三二年、カナダの首都オタワにスタジオを開いたカーシユは、次第に才能を認められるようになり、やがて政府首脳や外国からの賓客が喜んで彼のレンズの前に立つことも珍しくなくなった。

しかし、彼の名を一举に有名にしたのは、一九四一年十二月、オタワを訪れたチャーチル英首相の写真であった。そのときの模様を、カーシユはこう書き記している。

「彼は不興げに顔をしかめながら部屋に入ってきた。敵のドイツ軍を睨むかのような眼で私のカメラをじっと見た。彼の表情は完全に私の気に入った（中略）。ただ、口にくわえた葉巻だけは、そのような厳肅で儀式ばった折にはどうもそぐわなかった。



ユーサフ・カーシユ

そこで私は何げなく葉巻をとりあげた。するとチャーチルは例のしかめっ面をいっそう歪め、首を威嚇し、前に突き出し、手を尻に当ててまざまざと怒りの表情を表わした。かくて、当時のイギリスの、挑戦的で不屈のイメージを表わす肖像写真となった。」

この写真は、ライフ誌の表紙を飾り、カーシユの名を一躍世界中に広めた。

第二次世界大戦中の一九四三年、カーシユはカナダ政府の依頼で英国を訪れ、国王ジョージ六世やエリザベス王女をはじめ、当時の主だった人物を撮影した。それを契機に、カーシユはモナコ、ノルウェー、ギリシャなどの皇族を写し、また政治、学問、社会、芸術などさまざまな分野で活躍する指導的人物をフィルムに収めてきた。

「どの人物の中にも、ある神秘的な要素が隠されており（中略）、（それは）無意識の身振りだとか目の輝きだとかのかたちで、あるいはすべての人間が彼らの内奥の自己を世間から隠すためにつけている仮面を脱ぐとき、ほんの一瞬のうちにやってくる。その瞬間の機会を促して写真家がシャッターを切るのだければ、作品は何の価値ももたない——という言い切るカーシユには、世界史の人物たちを身近に観察してきた人の確かな目がある。

カーシユは一九七〇年、大阪万博の写真顧問として来日したが、その折り、万国博住友館委員会と全日本写真連盟の共催で「世界の巨匠ユーサフ・カーシユ写真展『世紀の肖像』」が開催されている。その後再来日したカーシユは、何人かの人間国宝を写して帰っていった。オタワのホテルにスタジオを構える写真家カーシユは、七十五歳の今も健在である。（文中の「」内は、曾根博義氏の訳を借用させていただいた。一部は意識した。）

編集後記

●カナダ——というと、雪と氷の白いイメージをもつ人が多いようです。事実カナダの冬は厳しく、ところによっては零下二、三十度というのも珍らしくありません。

●しかし、人々は家の中に閉じ込めてなどいません。職場も住居もセントラル・ヒートリングが完備し、シャツ一枚で暮らせるようになっていますが、戸外では大人も子供もスキー、スケート、カーリング、冬祭り……と、冬ならではのレクリエーションに余念がありません。交通や産業活動も、もちろん通常通りとはいきませんが、さまざまな工夫をほどこして、できるだけ支障のないようにしています。「カナダの冬」特集、いかがでしたでしょうか。

●愛読いただいた「われら姉妹都市」は、二応今回で中断します。ご協力下さった皆様に、心からお礼を申し上げます。他の姉妹都市については、折りをみて掲載する予定です。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三三三八

カナダ大使館広報部